挿絵画家・石井鶴三と子母澤寛（梅谷松太郎）
――新出資料からみる「国定忠治」・「父子鷹」制作事情一面

松本和也（信州大学人文学部）

一、はじめに

挿絵画家としての石井鶴三は、挿絵を提供することを通じてさまざまな文学者と関わりをもった。[1] 協働作品（コラボレーション）がすぐに浮かぶ文学者としては、上司小剣、中里介山、直木三十五、吉川英治などが代表格ということになるが、子母澤寛（一八九二～一九六八、本名・梅谷松太郎）も、長いつきあいのあった文学者の一人である。

本稿のねらいは、石井鶴三と子母澤寛の関わりを、信州大学所蔵「石井鶴三関連資料」から発見された新出石井鶴三宛子母澤寛書簡をはじめとする資料群を手がかりに、具体的に明るみに出すことにある。併せて、それぞれに性質の異なる資料群（書簡・ゲラ等）の検討を通じて、挿絵（画家）の周辺に注目することで明らかにし得る問題領域を、事例報告を通じて開拓‐提案することも、本稿の目指すところである。

まずは、両者の協働作品（コラボレーション）――子母澤寛の小説に石井鶴三が挿絵・タイトルカットを提供したもの――を確認しておこう。

①子母澤寛「国定忠治」
『大阪毎日新聞／東京日日新聞』（一九三一・一一・五夕～一九三三・六・六夕）、挿絵一七四点、タイトルカット一六点。

②子母澤寛「松五郎鴉」
『サンデー毎日』（一九三三・九・一七～一二・二四）、挿絵三〇点、タイトルカット一五点。

③子母澤寛「国定忠治」（大毎版「国定忠治」続編）
『オール読物』（一九三四・七～一二）、挿絵一五点、タイトルカット六点。

④子母澤寛「父子鷹」
『読売新聞』（一九五五・五・一九夕～一九五六・八・一三夕）、挿絵四五〇点、タイトルカット九〇点。

間に二〇年ほどの空白期を挟むものの、「子母澤さんのお仕事は、維新もの、股旅ものに大別される」[2] という尾崎秀樹の評言に即していえば、石井鶴三は前者にあたる晩年の大作「父子鷹」と、前者にあたる初期代表作「国定忠治」とに、挿絵画家として関わったことになる。

こうした長きにわたる関係の中から、「石井鶴三関連資料」には三通の鶴三宛年賀状が残されている。一通めは『オール読物』版「国定忠治」連載直後の一九三五年（仮番号［書7―620］）、二通めは一九三八年（仮番号［書11―147］）、三通めは「父子鷹」連載終了後の一九五七年（仮番号［書6―433］）のもので、いず

れも裏面は印刷物となっており、署名と表書きのみが直筆の葉書である。他に、次の暑中見舞いも一通確認されている。

1、石井鶴三宛子母澤寛書簡（仮番号［書4―391］）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

暑中のお見舞を申上
げます、相変らず御元
気の事と思ひますが何
分ともひどいお暑さ故
この上の御自愛を切に
お祈り申上ます
子母澤寛

宛先は、「東京市／板橋区板橋町／三ノ二六六／石井鶴三先生」、消印の日付は一九三三年七月二七日、時間は読みとれない、地名は大森。絵葉書に書かれたもので、右の文面は表面左半分に記載されており、裏面は金鶏山のモノクロ写真である。

内容は、文字通りの暑中見舞いだが、「国定忠治」連載を終えて間もない時期であることから、ねぎらいの意もこめられていたものと思われる。

以下、時代を追いながら、具体的な検討を進めていく。

二、梅谷松太郎時代――直木三十五「益満休之助」

大学卒業後、新聞記者としての生活をはじめた梅谷松太郎は、横須賀の地方紙、釧路毎日新聞、読売新聞をへて、一九二六年二月に東京日日新聞に移る。その後の、記者の業務をこえた物書きとしての活動については、次に引く事典記述を参照したい。

社会部の遊軍記者となり、社会部長小野賢一郎のすすめで、聞き書き風の連載（たとえば『味覚極楽』など）を書きはじめた。昭和三年には、明治維新六〇年で『戊辰物語』を書き、八月には古老聞き書きを主とした『新撰組始末記』を処女出版した。このときから子母沢寛のペンネームを用いた。大森新井宿子母沢に住んでいたからである。

また昭和五年には、実証的な『笹川の繁蔵』を、「サンデー毎日」に書く。この年は、単行本として、『幕末巷談』などを塩川書房から、『遊侠奇談』を民友社から発行した。六年「サンデー毎日」に『紋三郎の秀』を発表してから、新しい大衆文学の作家としての面を示しはじめて、七年には「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に、長編『国定忠治』を書き、股旅もの作家としての立場を確立した。翌八年六月新聞社を辞め、一五年にわたる記者生活を清算するとともに、この間蓄積した聞き書き、回顧談を利用した作品を書いて、大衆文学に幕末の社会性の背景を感じさせ、また会話などに独特の語り口を示した点が、作品の特徴となった。(3)

「石井鶴三関連資料」から確認できる石井鶴三と梅谷松太郎の最初の接点は、一九三一年末のことである。具体的にいえば、『サンデー毎日』の東京駐在も兼ねていた時分に掲載された直木三十五「益満休之助――『南国太平記』続編――」（『サンデー毎日』一九三一・

一・三～五・二二）の挿絵を石井鶴三が担当することとなり、その際の編集担当が梅谷松太郎だったのだ。同作に鶴三は、挿絵三一点、タイトルカット一一点を寄せている。ちなみに、鶴三は直木三十五の前作「南国太平記」（『大阪毎日新聞／東京日日新聞』一九三〇・六・一二夕～一九三一・一〇・一六夕）にも挿絵を寄せている。[4]

「益満休之助」の挿絵依頼については、すでに紹介されている「石井鶴三関連資料」内の書簡に、関連する記述がみられる

2、石井鶴三宛新妻莞書簡（仮番号［書7―858］）

書簡当該箇所本文の翻字は、以下の通りである。[5]

「益満休之助」の挿絵、［御承認　右傍挿入］何よりうれしく存じ上げます、東京駐在の
梅谷松太郎君（ペンネーム子母沢寛）が伺ひ
ますから、よろしく願ひたく、
なほ、絵は出来るだけ大きく［改ページ］

カットは第一頁の半分ぐらゐを占め、
次のは、第二、第三頁の真中へ、跨る
やうなものにしたいなどゝ念じて
ゐます、宜しく御高配願上ます
忙中の走り書御判読の程を
匆々敬具
十二月二日
五、六日頃までに第一回を持参に
梅谷君が伺ふ筈になつてゐます

一九三一年一二月二日付けの右書簡によれば、大阪毎日新聞社・新妻莞からの依頼により、鶴三は「益満休之助」の挿絵を引き受けていたことが確認できる。さらに、担当・梅谷松太郎の紹介と、挿絵・カットの誌面レイアウト案までが記されている（この案は、そのままといってよいかたちで現実のものとなっていく）。

これに連なるのが、梅谷松太郎による次の書簡である。

3、石井鶴三宛梅谷松太郎書簡（仮番号［書10―214］）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

（一枚め）
いつぞやは御面倒をおかけしました。
大阪の新妻氏からもお願ひ申上げてある事と思
ひますが正月（サンデー毎日）からの直木氏の
「益満休之助」の絵を是非御承諾いたゞきたい
と思ひ参上致しました、
月曜頃に原稿何回か出来ます筈、すぐ持参
致しますが　御迷惑とは思ひますけど　まげて
御引受下さいますやう、幾重にもお願ひ申上
ます　　五日午后二時半
　　梅谷松太郎
石井先生
（二枚め）
（宛名）梅谷　　（発信人）新妻

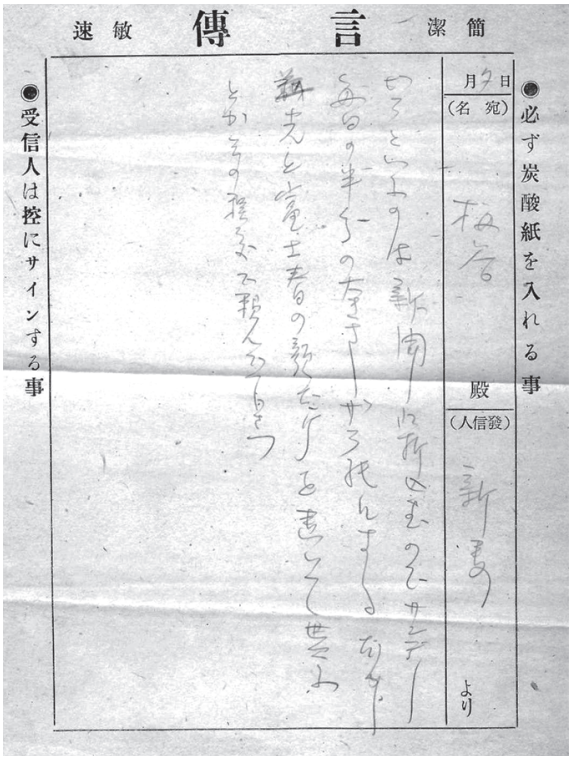
ビラといふのは新聞に折込むのでサンデー
毎日の半分の大きさザラ紙にする　だから
［一字不明　ミセケチ］［益　朱上書］光と富士春の顔だけをかいて
貰ふ
とかその程度で頼んで下さい

一枚めは、便箋に書かれたもので、封書はない。先の書簡（仮番号［書7―858］）と対応する内容であることを考慮すれば、「五日」とあるのは、一九三一年一二月五日のことだと思われる。

冒頭の「御面倒」が具体的に何を指すかは未詳、以前に東京日日新聞社社員として鶴三に依頼した仕事があったと思われる。

本題は、先の書簡（仮番号［書7―858］）に重ねての、直木三十五「益満休之助」への挿絵執筆依頼である。この書簡を書いた時点で、まだ梅谷は鶴三が挿絵執筆を承諾したことを知らなかったようである。また、先の新妻書簡では、五日には、「益満休之助」第一回原稿を松谷が持参する見通しだったが、この時点では原稿を手にしておらず、少し遅れているようである。それでも、「月曜」――この年の一二月五日は土曜日、従って「月曜」は一二月七日――には、数回分の小説を「持参」できるというのだから、挿絵担当者の確定に先出ち、小説の執筆が進行していたことになる。逆にいえば、小説は出来つつあり、新年号からの掲載が決まっていながら、挿絵担当者が確定していなかったのである（実際は数日前に、鶴三が承引しているが、それにしても直前のことである）。文面の切迫感はこうした状況のもたらしたものであろう。

あわせて折り畳まれていた二枚め（【図1】）も、やはり直木三十五「益満休之助」に関するものである。こちらは、社内用の伝言用紙と思われるメモ用紙に書かれた、新妻莞から梅谷松太郎への指示である。こちらは新聞折り込み用「ビラ」の絵の依頼で、登場人物に関する具体的な指示がみられる。


簡潔　伝言　敏速
◉必ず炭酸紙を入れる事
月　日
（名宛）　梅谷　殿
（人信發）　新妻　より
◉受信人は控にサインする事

【図1】書 10-214（2 枚目）

この件に関しては、次の書簡でも話題とされている。

4、石井鶴三宛梅谷松太郎書簡（仮番号［書10―220］）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝啓
おいそがしいところへお無理ばかりお願ひし
まして誠に恐縮でございます。
例の宣伝の方に用ひます絵どうぞこの

ものへお渡し下さいまし。
実際御無理でお気の毒は万々承知して
ゐるのですが――。
草々
梅谷松太郎
石井様

宛先は、「板橋中丸二六六／石井鶴三様」、切手がはられておらず、直接持参したものかもしれない。裏面には「東京市麹町区有楽町一丁目十一番／東京日日新聞社内／『サンデー毎日』編輯部」と刷りこまれ、つづく電話番号の上から「梅谷松太郎」と直筆で書かれている。また、右上部には「十日」と記されている。

この文面では、すでに鶴三が挿絵を引き受けたことが前提となっており、つまりは五日～一〇日までの間に、梅谷も鶴三の承引を確認できたものとみられる。

宣伝ビラの詳細は未詳だが、先の新妻によるの指示通りの絵が「新連載長篇小説予告」（『サンデー毎日』一九三一・一二・二七）に掲載されている。同誌同号の正確な刊行日は未詳だが、「直木三十五」の挿絵を担当していた鶴三こそは、その続編の挿絵を、短期間のうちに依頼し得る、唯一無二の存在だったはずだ。

三、子母澤寛作・石井鶴三画「国定忠治」

「国定忠治」から、石井鶴三にとって子母澤寛は担当編集者から作家へと変じていく。もちろん、この協働（コラボレーション）作品は、やはり間近で接してきた子母澤寛が、鶴三挿絵を高く評価していたことに由来するようである。そのことを証立てるのは、次に紹介する新出の石井鶴三書簡である（ここでの引用は直接関係する箇所に限り、全文は注に掲出する[6]）。

5、石井美佐宛石井鶴三書簡（仮番号［書1―273］）

書簡本文（当該箇所）の翻字は、以下の通りである。

十八日東日社より先日の挿絵の返事をきゝに来らる　お前さん
から返事があつての上と思つてゐたが事情やむを得ず吾輩としては
ひきうけてもよい方にかたむいてゐたことであり［一字不明　ミセ
ケチ］大抵おひきうけ
出来ると思ひますと返事をした　最初五十回位との話で
あつたのが百回位となつた［来　ミセケチ］「檜山兄弟」は来月七日
で終る由
そのあとすぐつゞくので来月早々から［また　右傍挿入］忙しくな
る筈なり来年
二月までつゞく予定なりまた神経質になる時が来るが
よろしく頼むわかりきつたことなから（ママ）後陣をお前さんがしつかり
やつてくれなければ挿絵の仕事はうまく［一字不明　ミセケチ］ゆ
かぬなりお前さんの
健康にどうか異状なからんことを祈る吾輩は大丈夫なるべし
されど出来得べくんばその前に数日旅行をして来たいと思つて
ゐる梅谷氏も吾輩が挿絵をひきうけてくれゝば力が入つて大に
努力出来ると云ひ居る由そのうち［打合せの　左傍挿入］一会ある
筈　新妻氏の
肝いりもあるらしい　梅谷氏筆は早い方らしい［話　ミセケチ］時

には
十回位書いてもらふ等のことも［出　右傍挿入］来るらしい　執筆中は特に
社を休ませてもらふ許しも出て居るとのことなり

この書簡には封書がなく、二枚の紙それぞれの両面に書かれたもので、鶴三から妻・美佐へ宛てられたものである。日付けは、末尾の「十九日夕」と、話題になっている吉川英治の連載小説「檜山兄弟」（『大阪毎日新聞／東京日日新聞』一九三一・一〇・二〇夕～一九三二・一一・一三夕）から考えれば、一九三二年一〇月一九日とみて間違いない（鶴三の情報が正しければ、「檜山兄弟」の連載終了は、予定よりも延びたということになる）。

そうであれば、次の新聞連載小説である子母澤寛「国定忠治」の挿絵執筆の打診は、連載開始の一ト月ほど前からあり、一八日におおよそ承引したということになる。その決断にあたっては、妻の承認を得る予定であったが、事後報告になったことを鶴三は詫びている。その所以は、鶴三自ら「神経質になる時が来る」と述べているように、〆切りに追われる中での仕事に、妻の理解が必要不可欠だと考えているからだ。つまり、鶴三夫妻にとって、新聞連載小説の挿絵という仕事は、大きな負担を伴うものなのだ。

それでも、鶴三としては梅谷氏の希望、「新妻氏の肝いり」、それから「梅谷氏筆は早い方らしい」という情報を総合的に判断して、挿絵を引き受けたということが、この書簡からはわかる。

あるいは、「お前さんの／健康にどうか異状なからんことを祈る」という一節からは、挿絵制作の一部（小説からの図案化など）に、美佐が関わっていたことも想像され[7]、興味深い書簡といえる。

ならば、実際に鶴三はどのような挿絵を描いたのか。

まず、その工夫については、「国定忠治の風貌」（『春陽会雑報』一九三三・四）で鶴三自ら次のように語っている。

此度、子母沢寛氏作「国定忠治」の挿絵を描くにあたり、まことに泥縄的だが、忠治の人となりに就いて大急ぎで調べて見た。

先ずその風貌だが、身長は五尺五分しかないのに体重は二十三貫あり、肥っているにかかわらず立居が非常に敏捷で脚の早いこと無類であったという。からだには毛が深く、殊に胸毛が濃く眉が太く眼玉が大きく口数の少ない男だったということだ。画像として信憑するに足るものは田崎早雲翁描くところの忠治像が唯一のものらしい。

その画像を見るに先立ち、どんな風に描かれているかと木村荘八に訊ねたら、横堀角次郎に似ている。横堀をもっと肥らして、にがみをつけたといった感じだと教えてくれた。

それで時日切迫の折柄最初の挿絵は、荘八の教えに従って描いたのだ。作者子母沢氏はこの最初の挿絵を見て、てっきり小生が草雲翁の忠治像を見てそれによって描いたのだと思ったという。

その後、草雲翁の忠治像を見るに及んで、荘八が言葉簡にしてしかも適切にこの画像の感じをいいあらわしていたのに感心した。絵の気合を鋭くつかんだ荘八の気合は凡ならざるものだが、その気合によく感応した吾輩の気合もまた万更でないかも知れない[8]。

右に名前があがった横堀角次郎（一八九七～一九七八）は洋画家、春陽会会員でもあり、鶴三が本作取材のために上州を訪れた際の案内役でもあった。いずれにせよ、木村荘八の「教え」によって描いた国定忠治が、子母澤寛にも通用したというのは、荘八・鶴三それぞれの「気合」ばかりでなく、息のあった両者の意思疎通を目の当たりにするようなエピソードとしても興味深い（鶴三画「国定忠治」挿絵は、【図2】・【図3】参照）。

【図2】1932.11.15.夕
© Keibunsha, Ltd. 2015/JAA1500047

【図3】1932.12.7.夕
© Keibunsha, Ltd. 2015/JAA1500047

ここで話題になった「田崎早雲翁描くところの忠治像」については、連載開始から二ヶ月ほどへて、鶴三も実見の機会を得る。その前後の出来事については、日記に記録が残されている。

一月九日（月）〔略〕挿絵二枚描きあげる　これで明日旅に出られる　一四日まである

一月一〇日（火）晴　池袋より自動車、上野着九時四〇分、横堀君来ていた　前橋着午後一時、大胡二時、自動車にて三夜沢山路にかかり滝沢、不動大滝を観て忠治の岩屋を探る、日暮れて滝沢に至り泊す　途中路に迷い迂回里余、月色よし

一月一一日（水）朝、雨のち晴（上州の天気）前橋に出で豊国覚堂氏に会い、いろいろ話をきく　得るところ多し
公園を散歩し、大胡に行き横堀君の家に厄介になる

一月一二日（木）晴　大胡より伊勢崎に出で忠治の墓を見国定に養寿寺を訪い住職より話をきき遺物、墓を見る、それより足利に行く　宿を定め荻野氏方を訪ねる　今晩よしとの事にて草雲先生筆、忠治像見せてもらう　感激深し[9]

旅立つための最初の準備は、挿絵を書きためることである。そのストックを使うかたちで、鶴三は上州を訪れ、国定忠治ゆかりの地を訪ねていく。最大の目的にしてクライマックスは、もちろん「田崎早雲翁描くところの忠治像」であり、実見した後に鶴三は「感激深し」と記している。ちなみに、先の「国定忠治の風貌」では、次のような鶴三の感想によって同文がしめくくられている。

かくして夜に入って足利市に到り草雲翁の忠治像に接したのだ。我等両人は頭をよせてこの絵を見入った。忠治の眼球ぐるぐる動いて光を発する如くであった。草雲翁の気魄忠治の気魄と合って火花を発し、ついにこの好画を成せるものか。[10]

こうした鶴三の工夫・研究に裏打ちされて描かれていく「国定忠治」挿絵だが、連載期間には次のような書簡もみられる。

6、石井鶴三宛梅谷松太郎書簡（仮番号［高1―34］）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝啓
お手紙をいたゞき　その上
春陽会御招待に接
しまして　誠に恐縮いた
しました。　駄作いろ
〳〵とお骨折をいたゞ
き大過なく過し居り
ますのは只々先生
の御好意によるところ
厚く御礼申上ます。
馬込までお出ましの由
お目にかゝれず残念に
存じます。
早速春陽会拝見
に出かけ忠治の活躍
を御麗筆の上に拝
見するを楽しみと致
しております
先づは御礼迄
草々
梅谷松太郎
石井鶴三先生

四月二十三日

宛先は、「東京市板橋町／三ノ二六六／石井鶴三様」、消印の日付は一九三三年四月二三日、時間は読みとれない、地名は大森。裏面には「東京市大森区新井宿二丁目一七四六／梅谷松太郎」と彫られた朱印が押され、右上部には「四月二十三日」と直筆で書かれている。

内容としては、鶴三からの手紙（未詳）への返礼を兼ねた、春陽会招待へのお礼状である。ここで指しているのは、第一一回春陽会展覧会（一九三三・四・二三～五・一四、於東京府美術館）で、鶴三はこの時、「雛鶏」・「風」・「裸女習作」・「藤花新緑」・「肖像」・「クロッキ（一）～（五）」とあわせて、「国定忠治」挿画八点」も出品しているのだ。同展については、文学者の宇野浩二が次のような批評を残している。

石井鶴三氏の作品は、今年は、私には、挿絵の画稿「国定忠治」の方が良かつた。が、去年の「南国太平記」の方が一層よかつたやうな気がする。然し、石井氏が『春陽会雑報』に書かれてゐる『国定忠治の風貌』を読んで、如何に石井氏が一新聞の大衆小説の挿絵を描くにも芸術的良心の強い人であるかが分ると共に、俗間では国定忠治といふと、直ぐ俳優の扮する風貌の立派な人間に考へてゐたのが、石井氏の研究で、『身長は五尺五分しかないのに体重は二十三貫あり、肥つてゐろにかかはらず立居が非精に敏捷で脚の早いこと無類であつたと云ふ』といふ珍らしい事実を教へられた事を私は感謝する。

殊に面白いのは『からだには毛が深く殊に胸毛が深く眉が太

く眼玉の大きい口数の少い男だったと云ふことだ。』といふ一節である。その石井鶴三氏が新発見された国定忠治が、恐らく原作者子母澤寛君の小説の『国定忠治』より、一層如実に現はされてゐると私は信じる。何故なら、五尺五分で二十三貫の忠治が街道を駈けて来る図、裸の忠治が川原で体を拭いてゐる図、その他数々の挿絵の画稿を見ると、その一つ一つの図が物を言ひ事件を説明してゐるやうに思へるからである。[11]

このように、鶴三の挿絵、その姿勢などが評価されていく中で、子母澤寛との一度めの協働（コラボレーション）作品は、無事連載終了を迎える。[12]

四、子母澤寛作・石井鶴三画「父子鷹」

その後、子母澤寛と石井鶴三は、それぞれの分野で活躍をつづけていくが、「父子鷹」において再びタッグを組むことになる。同作（小説）については、尾崎秀樹が次のように評している。

子母澤寛の『父子鷹』は、『おとこ鷹』『勝海舟』などと並ぶ、ひと連なりの長篇である。子母澤寛の代表作であるだけでなく、戦後の収穫のひとつに数えられる。昭和三十年五月十九日から翌三一年八月十三日にかけて、「読売新聞」の夕刊に四百五十回にわたって連載された。挿絵は石井鶴三だった。勝小吉とその息子麟太郎の、父子というよりもむしろそのもうひとつ奥にある人間的な交渉を、歴史に即してたどっているが、作者のねらいは小吉の八方破れな行動や、その彼をとりまく江戸市井人のさまざまなふれあいを、幕末江戸期の風物詩の中にとらえようとするところにあったのではないか。[13]

鶴三が担当となった経緯は未詳、依頼状なども発見されていないが、協働（コラボレーション）作品の成果については、「子母澤寛の個性と石井鶴三の個性が、あうんの呼吸で一瞬のうちに合致、物語の展開と挿絵との内的関連が緊張した太い糸でピンと張られていく」と評した紅野敏郎によって、次のように高く評価されている。

鶴三の挿絵はとくに名も無き侍の怒り、悲しみ、その喜び、その楽しみ、つまり喜怒哀楽の表情と行為を一刷けで勁く描ききる。それは机龍之助においても、宮本武蔵においても同じであるが、物語の内容に応じて、そのスケッチはやはり千変万化する。基本、基軸は不変だが、その様態は実にさまざまなかたちで花を開かせる。小吉が登場する場面、二人、三人、いや集団として活躍するシーン、どれをとっても、殺気と静かさとが、裏表の関係で描き出されている。[14]

執筆期間中、毎日進行していく新聞連載小説に、苦しみながら挿絵を描いていく鶴三の姿は、日記に読むことができる。そのはじまりは、「一九五五年五月一〇日（火）」の項に書かれた「晴　教授会　和田さん来、桜木町宿「むらた」へ案内さる博物館見る」[15]というものであった。「和田さん」は、読売新聞文化部記者の和田伊都夫である。日記によれば、鶴三は本作の挿絵をこの「むらた」で描くことが多かったようである。

また、日記には、同年「八月二〇日（土）曇」の項に、次のように記されており、興味深い。

98
99
100午前本文写し午後三時郵送　106～107及101～105ゲラ刷届く[16]

ここに並んだ「98～105」という数字は、「父子鷹」の連載回数を示すものだろう。メモ書きのため「本文写し」が具体的にどのような作業かは確定できないが、この時期、「98～100」回の本文を手元におきながら挿絵を描いていたこと思われる。

また、つづく一週間分の「ゲラ刷」（101～107回）も届けられている。日記には、他に「ゲラ刷」に関する記述がみられないので、このタイミング・量が恒常的なものであったどうか判断はできないが、早めに、多めの原稿が挿絵画家に届くこともあったということは確認できる。

そして、「石井鶴三関連資料」からは、四枚＝二日分の「ゲラ刷」が発見された。挿絵（画家）という観点からは少し外れるが、この資料に即して、本文の異同についてもふれておきたい。

まず、発見された「ゲラ刷」を紹介しておく。

7、『父子鷹』ゲラ刷（仮番号［書5―139］）

この資料は、「父子鷹」の校正刷り四枚である。一・二枚めが、「父子鷹【178】隠居（三）」（『読売新聞』一九五五・一一・一三夕）、三・四枚めが「父子鷹【179】隠居（四）」（同一九五五・一一・一四夕）に該当するものである。

四枚めの裏には、鶴三の手になると思われる、「父子鷹」挿絵に関する鉛筆のメモ書きが残されている。

172　本堂の階段小吉群衆に大喝す　八日
173　ためし切り　九日
174　岡野の家らんみやく　十日
175　小吉岡野のえり首つかみひつぱり出　十一日
176　木剣素ぶりのあと小吉岡野　十二日
177　岡野小吉
178　仕立屋
179　やくざ風な男二人、浪人風一人と小吉

〔原文横書き〕

以下、「ゲラ刷」段階に鉛筆で書きこまれたれた校正（著者か編集者によるものだと思われる）については、削除部分を取消線、加筆部分を【】内に示し、「ゲラ刷」と新聞掲載本文との異同については、削除部分を二重取消線、加筆部分を〔〕内に示した。なお、改行は当初のゲラに準じている。

（一枚め）
父子鷹 178
隠居（三）

年の瀬が迫って、小吉は〔夜、〕男谷道場の戻りに、どうしていやがるだろうと、~~夜になって弁治のいる長屋の前を然【然（さ）】りげなく~~〔なげに〕通ったら、若いお弟子のお針子が大勢いて、弁治と女房の小新が並んで縫物をし

ているのがちらりと見えた。界隈の噂でも、近頃はとんと真面目に稼いで〔やって〕いるようだし、刀剣講の歩金も纏って入った事だろうから、いゝお正月を迎えるだろう。

「おや？」

長屋の角のところにしゃがんでいた男が一人、俄かにぱた〳〵と駈け出して行った。ちらりと見たがどうもやくざな奴らしい。

「足を洗ってあゝしているんだ、真逆岡っ引でもねえだろう――あゝ、わかった」

と小吉は眉を寄せて十寸立停って‖

「正月の見世物に大阪下りの綱渡りがかゝるときいたが、ひょっとすると、あ奴らが」

急に踵を返して、がらりと弁治のところへ〔格子戸を〕入って行った。

「弁治さん、ちょいとこっちへお顔を貸して下さい」

といった。弁治も小新もびっくりした。

「か、か、勝様」

と思わず吃って大あわてだ。〔改行〕「内緒で頼みたいことがあるのだ。おかみさんはいゝ、弁治さんだけ、ちょいと手間を欠【欠】いて下さい」

暗がりの中に、小吉は弁治を抱くように寄って、

「大阪の綱渡りが来るようだ。お前にはおれというものがついているから、真逆な事はしめえと思っていたはこっちの自惚れよ。どうやら手を廻している様子だ。気をつけろよ」

「へ、覚悟はして居ります。女房もその気で、いつどんな奴が飛込んで来ても見っともない殺され方はしますまいと、あ奴が云って〔居り〕ます」

（二枚め）

「はっはっ。惚気るはねえだろう。今、そこに変な奴がしゃがんでいやがった。小屋が開いたらおれがきっぱりと、筋目の立った渡りをつけ〔てや〕るから、それ迄の事だ〔は〕、夜なんざあ間違っても外へ出るな」

「へえ」

「ただそれだけだ。嬶を大切にせ」

小吉はもう行って終った。その
小吉が入江町の曲り角で、やくざ
風の奴が二人、それに着流しの浪
人風の奴が一人〓〔、〕何にかぶつ〳〵
云い乍らこっちへ来るのに出逢っ
たのはそれから直ぐである。
小吉は、ははーんというような格
好をした。
「おい、お前らひょっとして、勝
小吉という男を採【探】しているんじゃ
あねえのか」
「え？」
一人が動悸っとしたらしく調子
ッぱずれの声を出した。
「若し、そうなら、おれがその勝
小吉だよ」

「隠居（三）」に該当するこの二枚のゲラは、一行文字数は新聞掲載スペースにあわせてあるが、行数は新聞の六九行に対して七二行となっており、当初三行オーバーしていたことがわかる。

プロセスとしては、子母澤寛が書き、新聞社で出校した後、内校まで済ませたゲラがいち早く鶴三のもとに届けられ、同時並行で子母澤寛が分量に配慮しつつ校正をしていた、ということだろう。オーバーしていた三行は巧みに削られ、掲載となっている。

引きつづき、翌日分もみておこう。

（三枚め）
父子鷹 179
隠居（四）
小吉はへら〳〵笑っ〓〔た。〕
「〓〓そうでなけれあいゝんだ
が、地路【路地】が入組んでいるからねえ、
剣術遣いの小っちゃな家なんぞを
探すは大変だと思ってお節介よ」
「ち、ち、違います」
一人のやくざはがく〳〵して一
寸慄えているようだ。
「そうか。〓〓〓〓余計な事をし
〓終〓たな。が、この辺は滅法物
騒なところ故、うろ〳〵していて、
斬っ払われる事がよくあるよ。気
をつけたがいゝね」
それっきり、すうーっと後も見
ずに行く。三人は何んという事な
しに立ちすくんだ。
暮の〓〓〔廿五〕日。まだ朝だ。
新しい半天を着た若い者を一人
つれて、大阪下り綱渡り「二代目
玉本小新」の太夫元がごつ〳〵し
た紋附に袴をはいてやって来た。
この前、お世話になった礼をく
ど〳〵といって、弁治兄イと五助

兄イをまたお頼み申したいとお探し申しましたが、どうしてもおところが知れませぬ。もし御存知ならばお知らせ願い度う存じます。

就きましては、初代玉本小新が脱座いたしましたため、今度二代目を引きつれて参上いたしました。

これはほんの御神酒料でと、真面目な顔つきで水引のかゝった包みを差出した。

「ほう、太夫元、呆けるはいゝ加減におし、あ奴（やつ）らの業を知らない事はないだろう」

「え？」

「だいぶ前から妙な奴らが、弁治のところを狙っている。弁治ばかりか、このおれがところも狙っているのさ。馬鹿だねえ」

「えーっ？」

　太夫元は髪の辺りの白髪をふるわせて【〔〕ぐうーっと反（そ）そるような格好でびやくりし、顔色も変った。

「はっはっ。――〔ほい、〕案の定、そんなところか」

　と小吉は、

（四枚め）

「実はおれもそんなところじゃあ〔だろう〕ないかと思っていたよ」

「へ？」

「何あにね〔な〕、変な風態の奴が、この間中から弁治をつけ廻したり、おれが家を覗きに来たりする。商売ものゝ玉本小新を奪られたと馬鹿な考げえを持ちやがって、恨みの半分もけえそうと〔す気で〕、ふところには危ない物を呑んでいる事だと、恥しいがおれも少々早合点をしていたわ」

「さようで御座いますか。いや、それは〔然様な事がございますかも知れませぬ。〕わたくしにも思い当ります」

「お前、小新はどうしていると思ってるえ」

「はい、あれはあなたのお身内の弁治さんの女房にして貰っていると思っております」

「お身内はないだろう――がまあその通りだ」

「あなたがついていて下さる、仕（しあ）合（わせ）でござりましょう」

「仲好くやっているようだ。ところで――」

と小吉は、

「お前は、余り話がわかりすぎるが」

「隠居（四）」に該当するこの二枚のゲラは、一行文字数は新聞掲載スペースにあわせてあるが、行数は新聞の七五行に対して七七行となっており、二行オーバーしていたことがわかる。

先のゲラと併せて考えてみると、いずれも組み上がりで数行のオーバーとなっていた。逆にいえば、掲載紙面の行数は変動するにも関わらず、子母澤寛の超過行数にはほとんどかわりがなく、となると、子母澤寛が書く時すでに当該回の分量が指示されていたか、あがってきた原稿／ゲラに即して、レイアウトをアレンジしていたことになる。ちなみに、「父子鷹」は、ほとんどの場合、二段で組まれ、中央に二段分で挿絵がレイアウトされ、その両脇（あるいは片側）に記事や広告が入っている。

この資料からは、新聞連載小説の制作事情について考えるための有益なヒントを導き出すことができる。第一には、挿絵画家が、どのタイミングで、どの程度の量・完成度の本文を目にしていたのか、ということ。第二には、ゲラという新たな原稿類を手がかりとした、小説家による本文の推敲の具体的なプロセス（今回の資料からは、本文内容に大きく関わる日付の変更などが確認された）。第三に、それらを総じた、新聞連載小説・挿絵制作の、複数のラインから成る進行の全体像と、それを支えた人的・技術的システムのフローについて、である。

もっとも、今回は小説家・挿絵画家双方に関して、当該時期に関する（日記などの）情報が残されていなかったため、断片的なことしか明らかにできなかったが、挿絵画家の遺品資料が右の一連の問題に照明を当てるものにもなり得ることは、示せたのではないかと思う。

五、おわりに――子母澤寛と石井鶴三

最後に、子母澤寛の小説に寄せた石井鶴三の挿絵が、当時の読者にどのように受けとめられていたかについて、「石井鶴三関連資料」に興味深い資料が残されていたので紹介しておきたい。

8、読売新聞支局宛 - 設楽翠窓書簡（仮番号［書1―451］）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

「父子鷹」と挿絵　　設楽翠窓

新聞小説と挿絵は不可分の関係にあつて、挿絵なしの新聞小説など、到底考へられない時代になつた。それで挿絵画家の責任の重いといふ事は、新聞小説の場合、挿絵が拙いと読む気がしないし、反対に挿絵がうまいと、妙に読み心をそそられるからだ。

小説は断る迄もなく文字だけのもので、挿絵があらうがなからうが、傑作は傑作であり、作品の価値に変りはない。従つて挿絵は従［改ページ］

であり、だから作品の不足を補ふといふのではなく、作品を視覚化し感銘の度を、一層高くさせるといふのである。

それで何処迄も小説と挿絵の限界といふものは判りして居るが、最近では、挿絵の重要性から新聞小説に関する限り、一見作家と画伯の合作と誤認され易い。此の言葉は作家のほこりを傷つけるものだらうが、しかし、自分の小説の挿絵はどうでもよい、と考へる作家は居ないだらうから、こんな事は問題にならないかも知れない。［改ページ］

むしろこんな問題は意に介せず、自作の作品を飾る為によい挿絵画家の絵を望み、画伯の為に協力を惜まぬといふのが一般らしいが、事実作家と画家が気を合はせて居る小説といふものは、詢に読んで居て気持よい。

本紙に連載されて久しい「父子鷹」は此の点、作者と画伯が息を合はせて居る所、実に目覚しい。阿吽の呼吸といふが、此の言葉は実際こんなのをいふのだらう。［改ページ］

「父子鷹」の作者子母沢寛氏は昭和七年十一月十五日から東京日日新聞に「国定忠治」を書いた。これが氏の出世作と思ふが、挿絵は矢張此の石井鶴三画伯であつた。「国定忠治」は大変な評判で、完結後改造社から出版された事であるが、今又「父子鷹」の傑作が二人の組合せで世に出るといふのは因縁深い事である。

挿絵画家と作家の組合せといふものは、その時々のものであらうけれども、一体子母沢寛氏と石井鶴三画伯とは、所謂うまが合ふと［改ページ］いふのではないだらうか、子母沢氏は性格的に固い物を扱ふ様だが「国定忠治」には貫くものが一本通つて居たし、此の度の「父子鷹」には一層強靭なものが貫かれて居り、此の気魄には真実うたれるものがあつた。

石井画伯の絵は固く、元来「父子鷹」の様な作品にはうつてつけである。「国定忠治」ではづんぐりむつくりの忠治がよく出て居たし、此の度は小吉、お信、岡野の隠居に孫一郎とそれ［ぞれ　右傍挿入］性格があらはれて居た。大体石井画伯の［改ページ］は表情がうまい。兄の彦四郎が中風になる前日、小吉の家を訪ねた時の笑顔など実によかつた。そして固いとはいふが、女の絵もよくお信など貞淑な中に、又女らしい色気さえあつて、何んともいへない物があつた。

「父子鷹」は日ならずして終るといふ。一年余毎日これを楽しみにして読んで来たが、此

の小説が完結するといふ事は何んとも淋しい。
これは熱心に読んで来た小説が終る度に味は
ふ気持であるが、此の度は事に深い様だ。［改ページ］

御紙の連載小説は他紙に比較
した場合いつも優秀ですが、父
子鷹は近来にない傑作で御座
いました。感銘深い余り同封
の様な感想を書きましたので
御送りいたします

昭和三十一年八月十二日

設楽翠窓

宛先は、「山形市■■■新■／読売新聞支局／御中」、消印の日付は一九五六年八月一三日、時間・地名は読みとれない。裏面には「西村山群西川町／設楽翠窓」と記され、左上部には日付を記されていたようだが、破損のため読みとれない。いずれも、「設楽翠窓原稿」（原稿用紙）に書かれたもので、一～六枚目までは、左上にNO.1～6とふられ、右上が綴じられている。加えて、七枚目として翻字した送り状が、一枚付されていた。

宛先の通り、この書簡は「父子鷹」連載終了間際に新聞社に送られた、鶴三挿絵を中心とした感想である。おそらくは、新聞社から鶴三のもとへと転送され、遺品として残されたものだろう。

差出人の設楽翠窓（本名・設楽松四郎）については、当初情報がなかったが、信州大学附属図書館中央図書館の折井匡による粘り強い調査の結果、ご遺族と連絡をとることができた。[17]

内容としては、新聞小説と挿絵の関係から説き起こし、挿絵の機能にふれた上で、「父子鷹」における子母澤寛と石井鶴三の関係を「阿吽の呼吸」・「うまが合ふ」と評しながら、「父子鷹は近来にない傑作」だと絶賛している。

もちろん、この一通を以て、「父子鷹」挿絵への評価とすることはできないが、少なくとも、このように受けとめ、感想状を送るほどの愛読者が存在したことは確かなのである。

しかもこの書簡は、公表されたものではなく、石井鶴三のもとで保管され、「石井鶴三関連資料」として信州大学に収められ、調査が進んだことによって、五〇年強の時をへだてて、ここに公開することになったのである。ここに、「石井鶴三関連資料」を整理・検討していくことの意義（の一端）は明らかである。

注

(1) 拙論「石井鶴三宛書簡の整理をはじめて――挿絵（画家）から近代文学・出版（研究）を考え直すために」（『信州大学附属図書館研究』二〇一二・三）、同「挿絵画家・石井鶴三とその評価」（信州大学附属図書館編『「時代小説作家と挿絵画家・石井鶴三」展・資料集』信州大学附属図書館、二〇一二）参照。

(2) 尾崎秀樹『子母澤寛　人と文学』（中央公論社、一九七七）五〇頁

(3) 松島栄一「子母沢寛」（『日本近代文学大事典　第二巻』講談社、一九七七）一八八－一八九頁

(4) 平浩一「直木三十五『南国太平記』試論――石井鶴三挿絵と書簡から浮かび上がるもの」（信州大学附属図書館編『「時代小説作家と挿絵画家・石井鶴三」展・資料集』信州大学附属図書館、二〇一二）参照。

(5)　全文は、注(4)参照。なお、同論に記載された書簡の基礎情報を転載しておく。――《封筒の宛先は「東京、板橋町中丸二六六／石井鶴三様／侍史」、消印の日付は昭和六年一二月二日。なお、大阪毎日新聞の社用封筒・便箋が用いられており、封筒裏の住所の欄には「大阪中央郵便局私書箱第四六番／株式会社大阪毎日新聞社／大阪市北区堂島上二丁目参拾六番地」と印字されており、その左側に、手書きで「新妻莞」とある。》

(6)　以下に、書簡全文の翻字を示す。

［二十七日に横浜着の時中島さんもおよびして御馳走するといふ話が
あつたがどうするか其日までにはつきりした知らせをよこしてくれ）右傍挿入］
前便菅原氏気附にて出した手紙は［お　右傍挿入］見たことと思ふ其後宅の方
かはりなし小生健康も今は良好なり別段の不自由のこともなし
とみが万事よくやつてゐてくれる感すべき少女なり　だから
帰りを強ひて急ぐ要なし健康上は汽車より船の方よかるべし
むぞがりむぞがられるといふ点だけはなれてゐて少しさびしいが一両日
位のことは気にするほどのことなし帰船は四日市によるといふ
ことだからかはつたところが見られてそれもよからうと思ふ
大牟田よりお送りの二箱到着柿は美味なり茄子は見事なり
筍も［一字不明　ミセケチ］珍らし　植物は早速植えたが場所の選定一苦労
にて考へ居ればあいにく来客ありといふ具合にて一日かゝつてしまつた
竹はつひによい場所が見あたらずかり植えとして置いた柿の葉
は［すでに　右傍挿入］色あせて美しからずたゞ［これによりて現場を　左傍
挿入］想像するのみ田舎は自然のめぐみ
ゆたかなることを思ふ墓参の日祖父様の［御　左傍挿入］命日なりし由
偶然によき日にあたつてよかつたと思ふ　肥猪の人々にも会ひしならむ
［十□　上部欄外挿入］お茶なととひきとめられしならむ　おさわさんには会ひ
しや
いね子さんに会ひし由無事にて何よりであつた　久留米も
大牟田もぢきにひき越す前でありしとのこと好な時にめぐり
あはせたものかな　しかしよかつた大牟田はまた遠いところにう
つる由　一寸のところで会へなかつたところだつた
（こゝまで書いたところ雅子来る　いとまごひの意なり　しはらく話して送り
出し
たるところへ依久子さんもくる　お帰りになつたところでまたあとをつゝける
今日は人来デーなり　裏面につゝく）［改ページ］
雅子結婚は［前便に伺つた如く　右傍挿入］二十八日なり　其前にお祝に高橋
へ行く心算なり
このことを今依久子さんに話したところ　前々から話もあり
其時には紋服帯其他一切依久子さんのを拝借のことに
なつて居る由　吾輩は知らすにゐたがさう云ふことなり
二十七日横浜からすぐ弦巻の方へまはつてその紋服を
お借りして来たら如何だらうとのこと考へ置かれたし
依久子さんは二十二日に東京をたつて綾部にゆかる由なり
綾部にて橘次郎兄さんとお会ひになる打合せの由なり
行つての御様子により弘兄さんを東京へお連れ
するやうになるかも知れぬ等のお話なり
前便に書きおとしたが十三日午后岩本さんが登美
子さんと雪野さんとお三人連れにて御出になつた
お前さんが［一字不明　ミセケチ］旅行中のことを知らせやうと思つてゐて未
だ
手紙が書けずにゐたところだつたそれでも吾輩
在宅にてよかつた　岩本さんに［そちらから　左挿］手紙を出したか未たなら
一筆出すべし
十七日奈良南氏夫妻東北地方を廻つて来京其夜行にて
帰宅するとのこと中島氏に誘はれ山水楼にて晩餐を共にす

結果は南氏に御馳走になつたことにな［一字不明　ミセケチ］［るな　左傍挿入］り［改ページ］

十八日東日社より先日の挿絵の返事をきゝに来らる　お前さん
から返事があつての上と思つてゐたが事情やむを得ず吾輩としては
ひきうけてもよい方にかたむいてゐたことであり［一字不明　ミセケチ］大抵
おひきうけ
出来ると思ひますと返事をした　最初五十回位との話で
あつたのが百回位となつた［来　ミセケチ］「檜山兄弟」は来月七日で終る由
そのあとすぐつゞくので来月早々から［また　右傍挿入］忙しくなる筈なり来
年
二月までつゞく予定なりまた神経質になる時が来るが
よろしく頼むわかりきつたことなか（ママ）ら後陣をお前さんがしつかりやつてくれな
ければ挿絵の仕事はうまく［一字不明　ミセケチ］ゆかぬなりお前さんの
健康にどうか異状なからんことを祈る吾輩は大丈夫なるべし
されど出来得べくんばその前に数日旅行をして来たいと思つて
ゐる梅谷氏も吾輩が挿絵をひきうけてくれゝば力が入つて大に
努力出来ると云ひ居る由そのうち［打合せの　左傍挿入］一会ある筈　新妻氏
の
肝いりもあるらしい　梅谷氏筆は早い方らしい［話　ミセケチ］時には
十回位書いてもらふ等のことも［出　右傍挿入］来るらしい　執筆中は特に
社を休ませてもらふ許しも出て居るとのことなり
関谷君の世話にて檜材一本買つた上等ではないが格安品にて
小さいものを作るにはよさゝうなので買つた五五金上ものは
いつれ（ママ）先に行つてまた買ふべし砥石も鑿金も買ひたし［改ページ］

阿蘇の温泉は何処［に　右傍挿入］行きしにや　お初さんも同行されたる
模様十六十七二日つゝきの休日にて好都合なりしなるべし
阿蘇も先年行つた時に比へると大分かすれることならん
そのころのことしきりに思ひ出られ感慨深し
お前さんの手紙は十六日出熊本よりのはかきまで受取つてゐる
お母さんのことはちつとも書いてないがまるでお前さんが
一人で旅行して居るが如き感あり
それから前便にも書いた如く大阪篤子は大分重態の［今日雅子の話では少し良
好の由なり　右傍挿入］
やうだが神戸から是非見舞つてくれ　伝染病だから
充分気をつくべし病院は消毒充分とは思ふが飲食［物　右傍挿入］に
注意すべし手をよく洗ふこと忘るべからず
仁川貞兄宅も都合つけば一寸でもよ［つ　右傍挿入］て来てくれる方
よからんと思ふ　阪急（ハンキウ）電車「仁川（にがは）」で下車して西方
川沿［ひ　右傍挿入］三町ばかりのところなり（阪急（ハンキウ）は委しく云へは阪神
急行電鉄なり略して阪急といふ　いま一つ阪神電気鉄道といふ
一線あればまちがはぬやう注意すべし　阪急の本線を「西宮北口（ニシノミヤキタグチ）」
で宝塚行に乗換へ三つ目かの停車場が仁川なり　赤十字病院
は［上本町（ウヘホンマチ）の　左傍挿入］奈良行電車発駅の近くなり　大阪梅田駅よりタクシ
ー五十銭［位　左傍挿入］で
行くべし　乗合自動車もあり（但し方向よく注意すべし）

美佐様　　十九日夕　　鶴三

別紙略図を添える
表裏とも見るべし［金は如何か足りるか
左傍挿入］

(7)　この可能性については、岩部定男氏（形文社）のご教示による。

(8)　引用は『石井鶴三全集　第五巻』形象社、一九八七）　二八七頁。なお、同書に収められた、石井鶴三宛木村荘八書簡（一九三二・一一・一九）も参照。

(9)　『石井鶴三日記　第一巻』（形文社、二〇〇五）「昭和八年」の項、四七七

- 四七八頁

(10) 注(8)に同じ　二八九頁

(11) 宇野浩二「春陽会瞥見」（『アトリエ』一九三三・六）　三三 - 三四頁

(12) 「国定忠治」は一九三三年に映画化される。監督は稲垣浩で、「旅と故郷の巻」・「流浪転変の巻」・「霽れる赤城の巻」の三作品が公開された。冨田美香編『千恵プロ時代　片岡千恵蔵・稲垣浩・伊丹万作　洒脱に、エンターテインメント』（フィルムアート社、一九九七）参照。

(13) 注(2)に同じ　九九 - 一〇〇頁

(14) 紅野敏郎「子母澤寛の『父子鷹』挿絵の時代」（『石井鶴三全集　第一〇巻』形象社、一九八八）　二〇六 - 二〇七頁

(15) 『石井鶴三日記　第四巻』（形文社、二〇〇五）　六一頁

(16) 注(15)に同じ　六二頁

(17) 折井匡による調査の経緯は以下の通り。手始めに「設楽翠窓」をネット検索し、何点か短歌の本にその名前がヒットし、号である可能性も想定しつつ、山形県西川町のホームページから教育委員会宛てに問い合わせを行った。山形県西川町役場の生涯学習課を通して、ご子息に当たる設楽淳二氏が、「西川町の応援団（町の事業）」として登録していたところから連絡がつき、設楽翠窓氏の本名が設楽松四郎であることを知り、書簡のコピーを同封し、研究目的での書簡の公表をお願いしたところ、ご快諾を頂いた。

※本稿で紹介した鶴三宛書簡の翻字にあたっては、荒井真理亜氏・髙野奈保氏・多田蔵人氏・出口智之氏の多大なお力添えを頂きました（もちろん、本稿の文責は松本にあります）。ここに記して謝意にかえさせていただきます。